

二、ふるさとの産物(桃・柚子・梅)

(一) ふるさとの産物「二俣尾の桃」

昔から、この地方の産物に二俣尾は「桃」・沢井は「柚子」・そして吉野は「梅」と言われてきました。古い書物「我が村の梅」に、「昔、一条院(※1)の頃、桃の長者と柚子の長者と梅の長者が居て、三人共に近郷にその名を知られたり…」とありますが、残念ながら今、その長者は誰なのか定かではありません。

二俣尾の「桃」については、江戸時代・文政年間(1818~1831)に書かれた武蔵名勝図会(※2)に「桃は二俣尾村の名産で、土地に良く合い家毎に屋敷地や畑の廻りに植え、実が熟れると江戸神田須田町へ『二俣尾桃』として出荷した。梨や柿等も成熟して良い実が採れたが桃には及ばなかった。二俣尾は三田領の内でも最も土地の肥えた所で良い実が生り『二俣尾桃』は『鎧通し』ともいわれ、実の回りはおおよそ九寸五分もあり、この長さが『鎧通し』という短刀と同じ長さなのでこの名がついた」と書かれています。(読みやすく直しました)

また、海禅寺総門の脇には「桃」を詠んだ古い歌碑があります。「花を見てかへるといわぬ人はなしたもとを桃のにしきたちきて」逍遙院内府公(※3)。「春の日のひかりもそらにみちとせの名におふ桃の花の下陰」。

桑門淨月(※4)。他二句あり。

また、碑の裏面には「立ちよりてあかぬ色香や花の名の ももたび ちたび春にあふとも」
根岸典則(※5)。この様に、桃を称える歌が刻まれていて、古くから桃の名所であったことを裏付けています。

明治二十七年の春、田山花袋が当地を訪れたおり、その時の様子を次のように紹介しています。「…ついに二俣尾の村にいたる。その村に入らんとするところにて、われは凝立して、
いとうつくしく横たわれる奇景をみたり。全村みな桃花なり、全村みな紅なり。村舎離落の間皆桃ならざるなく、山嶺水涯の辺、みな紅ならざるなし、あまつさえその村の少しく高き所より、次第々に多摩の岸頭近き処まで低くなりて行きたれば、一望すれば、ただそれ紅なる雲の簇り出でたるが如く、赤城の霞の棚引きわたれる如し。…」(※6)。誇張があつたとしても、村には多くの桃の木が植えられていて花の咲く頃には、二俣尾村全体が紅色に染まる程、栽培が盛んに行なわれてことがわかります。



海禅寺総門の歌碑 (左側の自然石)

「桃の里」復活への取り組み

戦後の食糧難の時代、生きるために麦や甘藷など必要な作物の増産が叫ばれて、特産品であった桃や柚子の木は伐られ、山地も開墾されて畑に変わるといふ時期がありました。

その後、世情も落ち着いた昭和二十九年、農業の振興を図り農家の経営安定を図るために、かつて当地の名産だった「桃」を復活しようと、三田村役場と三田農協が提携して「桃の里」復活へ向けた取り組みを始めました。

果樹園の整備や苗木の導入については、村が助成を行い、農協と青年団が提携して「桃の里」復活へ向けた事業を開始したと、当時の村の広報紙「三田村時報」(※7)が伝えています。

当時、三田農協営農指導部の須崎常男部長は「『桃の里』復活について、役場や農協も、農家も青年団も、共に真剣に取り組んだ。初めて桃の栽培をする農家もあつて、皆で助けあい協力しあつて困難に立ち向かった。その結果、生産は順調に軌道に乗り『奥多摩桃』として出荷することができた。消費者からも市場からも、この『桃』は美味しいと評判になり、高い評価を受けるようになりました。再び、二俣尾地区に昭和の『桃の里』が復活したと皆喜んでいた。反面、この頃の日本経済は本格的な高度成長期に入り、国内の産業発展と共に雇用が増大し、就職することによって現金収入の道が開けたことから、農家戸数は年々減少し、自慢の『奥多摩桃』も残念ながら出荷量が徐々に減り、衰退の道を辿ることになってしまった」と話された。

「桃」についての縁起

桃は、古来より「災いや、邪気を払う力を持つ」と伝えられています。毎年三月に入ると、「ひな祭り(桃の節句)」を迎えますが、女兒のいる家では、雛壇を設け雛人形を飾り、菱餅等を供え、桃の花を飾って祝いますが、子等の健やかな成長と幸せを祈るのもこんな由縁からでしょうか。

(注)

(※1) 一条院、一条天皇は、枕草子・源氏物語の舞台になった平安貴族文化の中心に在位されていた天皇です。寛弘八年(1101)六月、若くして崩御。

(※2) 「武蔵名勝図会」は、江戸時代後期、多磨郡の名所、旧跡が挿絵入りで纏められた地誌全十二巻。



「奥多摩桃」のラベル

- (※3) 逍遙院内府公は、三条西実隆のことで室町時代の京都の公家、歌人、歌の学者。
- (※4) 桑門浄月は、青梅市谷野、真浄寺の住職で和歌、俳諧に長じていた。
- (※5) 中原典則は、本姓は根岸、江戸時代の青梅文芸興隆期中心の人で、和歌、国学等に秀でていた。
- (※6) 文豪田山花袋著「文学に見る日本の川」より」
- (※7) 広報紙「三田村時報」(昭和二九年四月二五日・21号)